

8月12日(月・休)発行

15
YEARS
1904-2019

ミュージック開館 15周年!

ほぼ

日刊サマーミュージック

Hobo Nikkan Summer Muza



©青柳聡

偉大な音楽、
偉大な演奏だけが可能な
心を押し広げる体験!

【8/11:東京フィルハーモニー交響楽団】

「生」と「死」。8月の午後の灼熱をよそにした音楽の楽園で、そのふたつが交錯した。「生」の歓びに溢れたワーグナーと、「死」への裂け目に立つチャイコフスキー。偉大な音楽、偉大な演奏だけが可能な心を押し広げる体験が、そこにあった。

ダン・エッティンガーは「歌う」マエストロである。もともとはバリトン歌手だった。指揮に転向してからもオペラは得意で、かつて常任指揮者をつとめた東京フィルとはイタリア・オペラからワーグナーの大作まで共演している。だから彼が紡ぐ音楽には「歌」がある。そして立体的

で、劇的だ。

古巣に戻ったマエストロは生き生きしていた。1曲目のワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、これぞ「楽劇」という演奏。透明感にあふれた弦楽器が音楽の連続性を強調し、木管はそれぞれのキャラクターを鮮やかに競い合い、金管はくつきりと喜ばしく鳴り渡り、本編のミニチュア版を出現させる。リハーサルで指揮者の指示によりマレットを替えたティンパニが、より軽やかにシャープに響いたのは効果的だった。

メインのチャイコフスキー《悲愴》は名演。とりわけ第1楽章は白眉だった。無から生まれた音が、さま

ざまな転変を経験しつつ破局へと突き進むようですが、異様な臨場感で描かれる。木管楽器のソロが奏でるつかの間の楽園から、いきなり奈落へと突き落とされる衝撃の凄まじさ。首席クラリネット奏者ベヴェラリの、ぶっくりとしたふくらみのある表情豊かなソロは絶品だった。

協奏曲は高木綾子をソリストに迎え、モーツァルトのフルート協奏曲第1番。晴れやかで清冽なソロを、コロラトウラ・ソプラノを伴奏するようにオーケストラが引き立てる。生と死の間に浮かんだ、屈託のない夏の空のような晴れ間。これもまた、音楽の奇跡。

(加藤浩子/音楽物書き)



ダン・エッティンガーと高木綾子

来場者の声

公開リハは音楽会を立体的に楽しむのにとってもいい企画だと思った(40代・公務員)／エッティンガーのメリハリのある指揮、悲愴のぞくぞく感がたまらなく良かったです(60代・あさちゃん)／「悲愴」がとても良かったです。曲が終わる前から泣けてしまい、声を出さないよう必死にこらえていました(50代・しゃこんぬ)／飾らないそのままの美しさをお持ちの高木さんの奏でる音はまさに「いのち」を与えられています。まるでモーツァルトが高木さんの下にいらしたように感じます(50代・介護福祉士)／「悲愴」第4楽章最後の休符・無音・緊張が多分1分ぐらい。こんな長いのは初めて(60代・やっちゃん)／色々な席で楽しめる公開リハーサル、舞台後方席は指揮者がどのように音を作り上げていくのかわかり、一体感が味わえて最高です(多幸ちゃん)／チャイコフスキー大迫力!美しい花火のようでした(50代・アリアママ)／暑さ100%の中、超重量級の演奏で元気が出ました(50代・テバ)／毎年思うのはスタッフさんが皆気持のいい方ばかりでミュージックに来るのが楽しいです(匿名)



NEXT!
サマーミュージック

フェスタサマーミュージック KAWASAKI 2020

7/23 (木・祝)～8/10 (月・祝) 開催予定

オリンピックもコンサートも楽しもう!!

詳細は 2020年3月下旬発表予定。乞うご期待。

